

# 大阪人根性で宇宙の謎を解く **小松英一郎**

マックス・プランク宇宙物理学研究所所長

text by 佐藤勝彦

**隨** 分と元気な学生だなあ」。これが当時、大学院生だった小松くんの第一印象である。関西弁の明るい声色で、次々と質問を繰り返す。分からぬことを徹底的に聞いて理解する姿勢は研究者にとって基本中の基本。だが、簡単なようで難しい。彼は恥を恐れず、疑問に正面からぶつかっていく。そこに新鮮な息吹を感じた。

その後、彼は米プリンストン大学に留学し、宇宙マイクロ波背景放射観測衛星「WMAP」のプロジェクト

→ 佐藤勝彦／宇宙物理学者、自然科学研究機構長、東京大学名誉教授

クトチームに参画。ここで「世界で最も引用された」と評される論文を書いた。現在観測し得る最も遠い宇宙からの光を測定し、宇宙の誕生からわずか38万年後の姿を明らかにした。宇宙が今、誕生から約137億年経っていることも彼の研究によって明らかにされた。

誰とでも分け隔てなくフランクに接し、疑問に対して真摯に向き合う。彼の“大阪人根性”は、今後も宇宙の謎を一つひとつ解明していくと期待している。



084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 084 085 085 085 085 085 085 085 085 085 085 085 085 085



## 肉球から覗く鋭い爪

# 石井光太

## ノンフィクション作家

text by 藤沢 周

**男** のくたびれたパスポートは、  
　　血の臭いがする。密輸麻  
　　薬の臭い、少女売春婦の股座の  
　　臭い、物乞いの死体の臭い、強姦  
　　されて精神を病んだ女の臭い、胎  
　　児の死体が転がるゴミ溜めの臭い、  
　　数ドルのために噴かれた硝煙の臭  
　　い…。  
　　撮り、書くのだ、と。表現者という  
　　業は、たえずその柔らかな足裏に、  
　　ジャーナリズムというスパイクをはか  
　　せようとするかも知れない。  
　　だが、石井は、想像を絶した暮ら  
　　しを強いられるそのスラムの人々か  
　　ら、楽しさや明るさまで嗅ぎつけても  
　　いる。つまり、安穩とした日本人で

アフガンやインド、ジャカルタ、フィリピン、イラクなど、アジアの底で生き抜く、「最貧民」と呼ばれる人々と、これほど寝食を共にした日本人がかつていただろうか。

ある自身の方が貧しく、脆いのではないか。ジャーナリズムやノンフィクション以前に、「物乞う仏陀」達は遙かに易々とその正負の価値観を裏切っているではないか。これこ

石井光太の両足の肉球はその地を経巡りながら、それでもいつも繊細で優しい。もちろん、手足をもぎ取られたストリートチルドレンを見る眼差しには、どこか呪われたものがあるだろう。俺は見るのだ、と。見て、そほんものの人間だろう。だから、石井は敬意を忘れないのである。もし彼の肉球から鋭い爪が覗くとすれば、「豊かさ」や「貧しさ」、あるいは「人間」という概念を安易に作り出し、安心している輩に対してだろう。

→ 藤沢 周／芥川賞作家